

第 28 回 群馬県老人保健施設大会

「実践する愛と思いやりの場 ー医療・リハビリ・看護・介護の現場からー 心豊かな老後社会を目指して」

第 28 回群馬県老人保健施設大会 大会長

介護老人保健施設創春館 施設長 名倉 隆夫



介護老人保健施設大会というのは、医療・看護・介護及びリハビリテーションの各分野に於いて、介護が必要になった老人の方々によりよいサービスを提供すべく、日常の仕事の成果を発表し検証する場があります。今年は 28 回目の大会ですから、そうした営為が 28 年間もの長きに亘って続いてきたことになります。ここで改めて、そうした善意にあふれた人達の素晴らしい活動と成果に対し、敬意を表したいと思います。今年の大会のテーマ「実践する愛と思いやり」というのは、まさにこうした大会そのものが、認識されるべき「愛と思いやり」の一つであると主張するものです。

50 年近く前、イザヤ・ベンダサンというユダヤ人（実は本当は山本七平という日本人だったのですが）が、「ユダヤ人と日本人」という著者を出版し、一大ベストセラーになったことがあります。ベストセラーの一要因となったのは、「日本人は水と安全はタダだと思っている」という、当時の人々にとって衝撃的な言葉でした。今では、水と安全には対価が必要という事は当たり前ですが、当時の日本人には寝耳に水の言葉だったのです。介護老人保健施設で働く人たちの日々の仕事を眺めていて、ふと 50 年も前の本の事が思い出されました。同じように、今の日本人が当たり前のように受けとり、しっかり評価されていないのが、介護老人保健施設の現場で働く人たちの「愛と思いやり」であるという事に思い至ったのです。

「愛と思いやり」のサービスと言え、昨今流行の「おもてなし」の心に通ずるものですね。現在の介護分野の現場では、その労働に対し、なかなか理解し難い、煩雑な労働単価が決められています。しかし、実際の現場では、頻回のナースコール、沢山の訴えに対する労働等、単価のない労働が山程あります。「サービス残業」という言葉がありますが、サービス労働といっていいでしょう。こうした労働に対し、見合う報酬を願うのは当然の事です、今大会で認識して頂きたいと思ったのは、こうした労働こそ「実践する愛と思いやり」であるという事です。お金に換算しない、極めて日本的な日本人同士の愛と思いやりの労働が日本社会を支えている事を、働く人は勿論、広く一般の人達にも理解して貰いたいと思ったのです。世界に誇れる素晴らしい日本人の人間性ではないでしょうか。

今回の特別講演では「生きる事、演じる事を」と題し女優の高橋恵子氏をお招きしました。高橋氏の美しさの秘訣や自らの介護体験などを拝聴しつつ、同時に俳優業についても触れてみたいと思います。私達の仕事というのは、台本がある場合もない場合もありますが、それぞれの分野で、私達は俳優になり、ある役割を演じているとも考えられます。演技するとはどういう事なのか、心に訴えかける演技というのはどういうものなのか。心が通じるとは？生きていく喜びとは？等々について高橋氏と共に、楽しくも魅力ある時間になればと願っています。

最後に、ご協力いただきました群馬県老人保健施設協会、北中毛ブロックはじめ県下の各施設の方々、ご協賛いただきました各社の皆様と大会運営委員の方々に心より感謝いたします。誠に有難うございます。

今大会が、皆様方の心の支えの一部となり、県内の介護老人保健施設がより一層人間性に溢れたものになることを祈念し、大会長挨拶とさせていただきます。